

近年の内モンゴルにおける「満蒙」関係資料研究の現状

資料保存・活用の取り組みの現状と課題

周太平

今日は「近年の内モンゴルにおける“満蒙”関係資料研究の現状」という課題をお話しますが、まず、中国全体の状況を紹介して、そのあと内モンゴルの状況についてお話をいたします。

まずハンドアウトの「一」で、戦前期満蒙社会関係資料（文化財）に対する位置づけにおいて、日中間で「溝」があるということです。「文化財」というのは私の見解ですが、「溝」というと、ちょっと分かりにくいかもしれません。日本では、「満蒙」とか「満洲国」をテーマとする研究成果は非常に多いし、関係資料の復刻や出版も良好で、閲覧の機会も増大しています。とくに、デジタルアーカイブ・プロジェクトも進んでいるようです。これに対して中国では、関係資料の保全・復刊や「満洲国」に関する研究はごく一部の専門家の間で進められているにすぎません。また資料の閲覧環境は大きな変化はありません。それはなぜかいうと、20世紀の満蒙地域に対する歴史が、中国の歴史意識のなかで、絶対的なマイナスの遺産として位置づけられてきたからです。とは言え、歴史研究において、中央政府から独立した地域政権として強調されることも不可能ではありません。しかしながら、それは中国の政治的イデオロギーからみれば、デリケートな問題であるわけです。ここに根本的な問題で「溝」が生じる所以があると考えられます。

1990年代、一部の専門家たちがこれらの貴重な資料の整理・研究の必要を提起し、1996年に「中国近現代史史料学会満鉄資料研究分会」（会長李新、顧問季羨林）が成立、97年に「満鉄資料整理研究プロジェクト」（1997年）がスタートしました。

それ以前の状況を見ると、1990年代以前のものとしては、つぎの三つの業績をあげることができます。第一に『中国科学院図書館現存旅大図書館資料目録』（8冊、満鉄調査部蔵書、ガリ版謄写版、1958年）。第二に『満鉄史資料』で、活版印刷で約30冊発行しました。第三に『東北地方文献聯合目録』（第二輯・外文部分）で、大連図書館が作成した目録集成です。

1990年代なかば以降のものとしては、ハンドアウトに記載した一覧をご覧ください。

1990年代なかばから進められた研究については、目録が集成的に作成されたことが重要な成果として評価されています。とくに、『中国館蔵満鉄資料聯合目録』が代表的な成果です。10余年にわたって400人以上の専門家の共同研究による成果であり、全30巻です。各巻100万余字、総計3000万余字に達します。34万種の文献資料の目録と索引集大成です。

じつは、満鉄資料研究はそういった「溝」を乗り越える一つの試みとして、日本と中国の専門家による共同作業が行われました。たとえば『旅大図書館資料目録』（1958）の作成に日本人学者も参加したと言われてはいますが、遼寧省档案馆などと長期間にわたって連携を有していた日本の研究者も少なくありません。また、『上海図書館総目』や『張家口図書館目録』も大阪の万国博覧会記念協会の援助のもとで完成できました。ここでは、遼寧省や吉林省さらに広西師範大学出版社などの研究者・スタッフが、学問の自主性を重視した結果であると思います。

目録類の作成は進みましたが、問題は、原資料の出版はどの程度実現できるかということです。さらにもう一つの重要な問題はインターネット事情であり、日本や台湾などの海外からデジタル档案資料の閲覧について、実際に非常に不便です。これは内モンゴルの個別の事情かもしれませんが、Gメールやグーグル検索を行うことができません。

つぎに、内モンゴルの状況についてお話しします。インターネットを用いた資料閲覧について、内モンゴルの状況は中国のどこの地域よりも遅れているように思われます。すなわち、自治区にある 112 の公共図書館のうち、歴史資料のデジタル化環境を有している図書館は一つもありません。満蒙関係資料の保存状態について言えば、以前、私たちの学生時代は非常によかったと思います。当時は日本語を読めるスタッフが多かつたし、満蒙関係資料も重要資料として大切に保管され、配架場所も工夫されていました。現在、世代交代によってこれらの資料に対する関心が薄れ、破損や紛失、さらに不用資料として廃棄されることも珍しくありません。検索索引や目録作成もまったくできておらず、1960 年代に作られた手書きの目録は失われました。たとえば、以前、戦前に日本人学者が作成した「上都」についての調査資料がありましたが、数年前、世界遺産の登録申請に使おうとしたものの、探しだすことはできませんでした。「上都」とは、モンゴル帝国のクビライが、モンゴル高原南部（現在の内モンゴル自治区のシリングル盟正藍旗南部）に造った都です。この調査資料は、日本語で書かれた大変貴重な資料です。結局、このような貴重資料まで失われてしまいました。フフホトだけでも約何百人の図書館関係者がいるにもかかわらず、資料の保全には大きな問題が存在しています。

近年、図書館関係者の作ったものとして、*Dumdadu ulus-un erten-ü monggol nom bicig-un yeringkei garcağ*（中国蒙古文古籍总目）、3 vol., Begejing, 1999；『内蒙古自治区線装古籍聯合目録』（3冊、北京図書館出版社、2004）という目録があります。ここに収録されているのはモンゴル語と漢籍ですが、さらに十数万種類の日本語やロシア語などの膨大な資料も貴重な文化財と見なす必要があります。モンゴルの歴史は、外国語の文献によって研究され構築されてきました。13 世紀のモンゴル帝国の歴史研究に関わる唯一のモンゴル語文献は、『元朝秘史』すなわちモンゴル秘史です。それも漢字転写で、最初に書かれたウイグル式モンゴル文字のテキストは、いまだに見つかっていません（最近チベットで発見されたというウワサがありました）。

ここに一冊の図書館関係の有益な書物があります。すなわち『内蒙古旧報

刊考録 1905-1949』(トウイメル編)のことで、これは、ひとりの専門家によるまったく個人的興味に基づく編纂作業で、最初は 1987 年に内部印刷という私家版にすぎませんでした。じつは、『フフ・トグ』紙もまた、同書から知られるようになりました(日本の研究者のあいだではすでに知られていたのかもしれませんが)。

このような事情から、モンゴルに関してなぜ日本語の資料や日本側による事情が多かったのかについては、歴史的に考察する必要があります。

近代内モンゴルの歴史は、日本を抜きにしては語れません。近代日本は大陸進出を強めて、内モンゴルの全体に大きくかかわっていきました。満洲国の領土の半分以上がモンゴル人の土地であり、モンゴル人の従来土地と彼らの独立要求があったことで、その新国家の樹立にあたって、モンゴルの「蒙」を国名の一部として入れるという案が最初からありました。しかしながら、実際の新国家樹立にあたって、なぜモンゴル人の期待に沿ったかたちで実現できなかったのか。ここにひとつの矛盾があったのですが、それでもモンゴル人のために特別な行政区域や高度自治機関を認め、設置しました。西部内モンゴルでは、このような事情はもっと明確です。徳王政権とか蒙疆政権とか言いますが、それは日本の影響のもとで、1936 年に蒙古軍政府、1937 年に蒙古聯盟自治政府、1939 年に蒙古聯合自治政府、1941 年に蒙古自治邦と名称は変化したものの、最終的にはほとんど独立政権になっていて、独立国家の体制をとっていました。

このような歴史的事情からみますと、当時の関係資料は、モンゴル近代史・内モンゴル地方史を研究するうえで絶対的に重要であり、不可欠な一次資料です。

これまでの大学の歴史系教員の社会的役割といえば、地方史の編纂が代表的でした。旗誌(部族誌)の編纂や文化財の認定、民俗調査、歴史資料の保全に果す社会的役割が、内モンゴル地域の大学の歴史系教員に課された新たな使命であると強く感じています。その際、一番の課題は歴史資料の保全です。毎年 7~9 月、私たちは地方でフィールドワークを行います。そこで実感することは、いろんな歴史や文化の伝統が消滅する危険性

が目の前で生じていることです。たとえば、モンゴルの伝統的な乳製品加工・乳文化と製菓・チベット医学要素などはともに減少の一途を辿り、その知識、技術や資料が失われようとしているということです。これらの状況をみて、私たちは、力をつくしてモンゴル医学博物館の設立を実現したわけであります。

歴史資料の保存や学術的活用については、さまざまな可能性や課題を考慮する必要があります。確かに、歴史的価値がある資料をできる限り保全しなければならないということは、私たちが直面する課題です。しかしながら、実際には具体的に解決すべき問題も少なくありません。たとえば、文献資料の場合、復刻出版にあたって法的問題の検討が必要です。たとい商業的利益を得るために出版するわけではなく、社会的活用を実現することが目的であるとしても、著作権など知的所有権の問題をクリアしなければなりません。

さらに、原資料そのものの形状を勝手に変更しないという原則も重要です。しかしこのことは、さまざまな技術的問題にぶつかることとなります。出版社の事情は、中国と日本とおおいに異なります。とくに内モンゴルの出版社は、技術の面で安心できません。復刻版では、原本の形状を再現しデザインや彩色もそのまま復元するなどの配慮が必要です。北京や上海の出版社は信頼できますが費用が高く、随意に連絡するには不便です。

さらに今後のデジタルアーカイブ化を構想する際、デジタル化になじまない資料の保存などにどう対応するか、たとえば実物資料や個人情報を含む資料をめぐる問題があります。

私たちが近年行った事業は、次の三つです。

第一に、出版プロジェクトで復刻版の刊行です。『内蒙古外文歴史文献叢書』（日本語文献、200巻）は、内モンゴル大学出版社から2012年に刊行を開始しました。

第二に、連合目録の作成準備です。内モンゴル自治区図書館・内モンゴル大学蒙古学文献中心・内モンゴル社会科学院図書館・内モンゴル档案館に協力を求めて、『内モンゴル館蔵戦前期満蒙関係資料目録』の作成を準備して

います。

第三に、『フフ・トグ』紙の復刻出版の企画です。同紙の索引要目を作成するとともに、デジタル化を展望しています。

ここで『内蒙古外文歴史文献叢書』の「序文」についての事情を紹介し、さらに満蒙関係資料の特徴を簡単に述べてみようと思います。すなわちそれは、私たちがなぜ当時外国人が作成した歴史資料を重視し研究しようとしているか、ということです。

重点プロジェクトとしての『内蒙古外文歴史文献叢書』は、各方面との交渉を経てようやくスタートしました。復刻版の「序文」はとても重要です。日本帝国主義の侵略批判をくり返し述べてもあまり意味はないのですが、それでも出版物の審査当局に提出する書類においてこの叙述は必須ですので、そのことをふまえて、執筆にあたってかなり工夫しました。そこで私たちは、資料の学術的意味を強調することにしました。

人類の歴史と文化は、民間に受け継がれてきた伝統観念や風習以外に、主として長い歴史のなかで蓄積された、知識の媒体としての各種文献と遺跡遺物とによって後世に伝わります。これらの文献と遺跡遺物がなければ、わたしたち人類の記憶は失われ、歴史や文化は保持されず、知識の蓄積も不可能となり、現在に対する理解はもとより、未来と向き合うこともできなくなります。

しかし、モンゴル人は歴史上自ら書き残してきた文献は限られているため、モンゴルの歴史と文化を研究するには、外国語の歴史資料によるところが非常に大きいのです。

モンゴル古代史については、13 世紀、イタリア宣教師ブラノ・カルピニの『モンガル人の歴史』、フランス宣教師ルブルクの『旅行記』、あるいはマルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) の『東方見聞録』以降、ヨーロッパ人によるモンゴルについての貴重な文献が多く現われました。よく知られているものとしては、18 世紀のフランス宣教師ジェルビヨン (Jean-Francois Gerbillon, 1654-1708) の日記・回想録、ロシアの使者ピチューリン (イアキンフ。Н. Бичурин) の『文献資料』 (1828 年)、ユック (Evariste Régis Huc)

の『韃靼・西藏・支那旅行記』（1851年）、イギリス宣教師ジェームズ・ギルモア（James Gilmour）の『蒙古人の友となりて』（1883年）と『蒙古探険記』（1886年）、ジョン・ヘドレイ（John Hedley）の『モンゴル奥地への旅』（1910年）、ロシアの探険家ブルジェワリスキー（Н.М.Пржевальский）の『モンゴルとタングト地方』、グリゴリー・ニコラエヴィチ・ポターニン（Григорий Николаевич Потанин）の『タングト・チベットと中央モンゴル』、ポズトネエフ（А. М. Позднеев）の『蒙古及蒙古人』（1898年）、『モンゴルと中央アジア』（1905-1906年）と『モンゴルとハラホト』（1923年）、フランスのレダン伯爵（Count De Lesdain）の『北京からシッキムまで：オールドス・ゴビ砂漠・チベットを通り抜けた旅』（1908年）、デンマークの探険家ハズルンドの（Henning Haslund）『モンゴルの人と神』（1935年）などがあります。また、世界的に有名な学者があらわれました。たとえば、スウェーデンのドーソン（C. D'Ohsson）、フランスのルネ・グルセ（René Grousset）、ポール・ペリオ（Paul Pelliot）、ルイ・アンビス（Louis Hambis）、ロシアのシュミット（I. J. Schmidt）、コワレフスキー（Joseph Étienne Kowalewski）、ゴルストンスキー（К.Θ. Голстунскимъ）、バルトリド（V. V. Bartol'd）、ウラヂミルツォフ（Б.Я. Владимирцов）、ポツペ（N.N. Poppe）、ドイツのヘーニツシュ（Erich Haenisch）、ハイシツヒ（Walther Heissig）、フランケ（H. Franke）、アメリカのラティモア（Owen Lattimore）、クリープス（Francis Woodman Cleaves）、サイルス（Henry Serruys）、ハンガリーのリゲティ（Louis Ligeti）、ポーランドのコトビッチ（Владислав Людвигович Котвич）、フィンランドのラムステッド（Gustaf John Ramstedt）、ベルギーのモスタールト（Antoine Mostaert）、スウェーデンのヘディン（Sven Hedin）などです。

19世紀半ば以降、帝政ロシアの南下政策に伴って、オリエンタリズムという文化的含意を有する学問領域が形成され、歴史学、人類学、文学、言語学などを背景とする広範な文化活動が展開されました。また大勢の探検家、旅行家、調査員たちがモンゴルや中央アジアに入りさまざまな研究調査が行われました。わずか40年間に50余りの調査団がモンゴル、ウイグル、チベット地域で現地調査を行い、多くの研究報告が書かれました。なかには数千頁

に及ぶものもあります。とくに、帝政ロシア政府の支援のもとで進められた帝立地理学会の活動が突出していました。

20世紀になると、近隣の諸国をはじめ、世界の各地からそれぞれの思惑をもって多くの探検者、旅行者、研究者たちがモンゴル地域を訪れてきて現地調査が続けられました。とりわけ19世紀末国際舞台に登場した日本は、日清戦争後朝鮮を影響下におき、さらに日露戦争後旅順と大連を獲得、南満洲鉄道を通して満蒙に浸透しました。日本は満蒙地域へ勢力をさらに拡張するために、大量の人員を派遣し、実態調査を実施しました。その結果、報告書、旅行記、踏査記録、研究著書、刊行物など多様かつ膨大な資料を残したことは、周知のとおりです。とくに、モンゴルについての各種の精緻な記録は、質量ともに世界屈指といってもよいでしょう。19世紀のロシアの活動が代表的であったとすれば、20世紀の日本は最も目立つ存在であり、多様な形で残された関係文献は、従来の満蒙史の文献とは比較にならないほど独自の内容を有しています。個人の活動を除けば、代表的なものに関東都督府陸軍部、参謀本部、南満洲鉄道株式会社調査部、善隣協会、満洲国と蒙疆政権の各関連機関による活動があります。例えば、『東部蒙古誌草稿』、『蒙古地誌』、『蒙古土産』、『蒙古法典の研究』、『土俗学上よりみたる蒙古』、『蒙古大観』、『非開放蒙地調査報告』、『開放蒙地調査報告』、『蒙古事情研究資料』、『蘇聯外蒙資料集成』等々です。現在、われわれの知る限りでは、内モンゴルだけで数千種の日本語原稿の文献が確認されています。これらの膨大な文献が満蒙地域に関する歴史研究や社会変動を理解するために、必要不可欠な資料であることは、関連する専門領域の共通認識となっています。

次に、現地の当時の日本人による実態調査資料について、コメントしたいと思います。戦前日本人によって作成された「満蒙関係資料」については、その編纂動機や目的から言えば、なかには作者の猟奇的関心や趣味・嗜好によるもの、あるいは明確に軍事拡張を志向するものなどの立場や限界を避けることはできません。しかし、いかなる動機であれ、かれらは土着の人々とは異なる文化知識の背景や観察眼を有しており、異国の風土と人情に対する強烈な好奇心とともに、しかも大多数の人々は測量や撮影などの技術とフィ

ールドワークの方法を身につけていました。一部の人はそれらの分野の専門家であり、正確で注意深い記録を残しました。こうして地元の人びとには周知の見慣れた光景や、あるいは当たり前であるがゆえに何の関心ももちえない大量の詳細な情報まで保存されました。当時の暮らしの息吹が感じられ、そこから新たな学術研究が生まれました。客観的に言えば、「満蒙関係資料」というモンゴル地域に関する大量の豊富な一次資料から、多くの学問的糸口（手がかり）を得ることができるのです。したがってそれは、歴史学、民族学（人類学）、社会学、経済学のみならず、自然科学関連領域においても貴重な財産です。このことは、内外の学术界、とりわけ国際モンゴル学界における共通認識です。これらの文献のかなりの部分は、当時の専門家たちによる「学術的努力」による重要な成果であり、いま人びとは、これら貴重な資料が十分に活用されることを渴望しています。しかし、資料の閲覧環境は劣悪です。内モンゴルは、中国国内の発達した地域と比べて、地方文献保存の取り組みは遅れており、理想を実現するために相当な時間と労力を要することは明らかです。

このため、内モンゴル大学近現代史研究所・内モンゴル自治区図書館学会と内モンゴル大学出版社が協力して、「満蒙関係資料」の復刻出版に着手しました。1949年までの「歴史文献」と言ってもたんなる歴史記述の資料ではなく、歴史上形成された各種の文献であれば、どのような分野の内容であっても収録することにしています。私たちは、まず日本語資料を中心に復刻し、さらにほかの外国語（たとえばロシア語）に着手する計画を立てています。これを契機として、内外の文献研究者との連携ができることを願うばかりです。

ハンドアウト

—

戦前期満蒙社会関係資料(文化財)に対する位置づけが日中間で「溝」がある。日本では、「満蒙」や「満洲国」をテーマとする研究成果は数多い。関係資料閲覧の機会も増えている(デジタルアーカイブの公開)。これに対して、中国では、関係資料の保全・復刊や「満洲国」に関する研究はごく一部の専門家の間で進められているにすぎない。

『中国近現代史史料学会満鉄資料研究分会』(会長李新, 顧問季羨林) 1996年

『満鉄資料整理研究プロジェクト』1997年

『歴史文献保護小組』(若手研究者) 1998年

『中国科学院図書館現存旅大図書館資料目録』(8冊, ガリ版, 1958年) 南満洲鉄道株式会社調査部蔵書

『満鉄史資料』吉林省社会科学院編, 中華書局 1979年

『東北地方文献聯合目録』(第二輯・外文部分) 大連図書館 1983年

* * *

『遼寧省档案馆日文資料目録』遼寧省档案馆編, 遼寧古籍出版社 1995年

『満鉄資料館館蔵資料目録』吉林文史出版社, 吉林人民出版社 1995-2003年

『満鉄密档』(全24冊) 遼寧省档案馆編, 広西師範大学出版社 1999-2004年

『上海図書館館蔵旧版日文文献総目録』上海科学技術文献出版社 2001年

『張家口市図書館館蔵日文図書文献目録』張家口市図書館編 2001年

『満鉄調査報告』(全25冊) 遼寧省档案馆編, 広西師範大学出版社 2014年

『満鉄調査期刊載文目録』(上中下冊) 吉林文史出版社 2004年

『中国館蔵満鉄資料聯合目録』(全30巻, 上海東方出版中心, 2007年)

原資料は出版物としての刊行も予定されていたが、PC 端末で閲覧できることなどを含めた閲覧状況の改善を図る必要がある。内モンゴルの個別の事情かもしれないが、Web が使えないことは不便である。

二

内モンゴル自治区は 112 の公共図書館があるが、歴史資料のデジタル化は

一つも実現されていない。戦前期の「満蒙」関係資料は世代交替によって次第に関心が薄れ、資料の破損紛失や不用品として破棄されることも珍しくない。

Dumdadu ulus-un erten-ü mongğol nom bicig-ün yeringkei garcağ (中国蒙古文古籍总目), 3 vol., Begejing, 1999.

『内蒙古自治区線装古籍聯合目録』(全3冊), 北京図書館出版社 2004年

『内蒙古旧報刊考録 1905 - 1949』(トウイメル編), 遠方出版社 2010年(初版 1987年私家版)。

近代内モンゴルの歴史は日本を抜きにしては語れない。日本は大陸進出を強め、内モンゴルの全体に大きくかかわっていった。

満洲国領土の約 2/3 はモンゴル人の土地。新国家の名称に「蒙」(モンゴル)字を入れる案 特別行政区設立

西部の蒙疆政権(徳王政権)。蒙古聯盟自治政府(1937)~蒙古聯合自治政府(1939)~蒙古自治邦(1941) 名称の変化(独立国家の体制)

近代満蒙関係資料は、モンゴル近代史・内モンゴル地方史の研究に不可欠である。

これまでの大学の歴史系教員の社会的役割は、地方史の編纂が代表的であった(旗誌・部族誌の編纂, 文化財の認定, 民俗調査, 歴史資料の保全)。

歴史系教員の新たな地域貢献のあり方の模索

モンゴル伝統文化(乳製品加工・乳文化と製菓・チベット医学要素など)に関わる知識・技術や資料の記録と保全。さまざまな事情によって、貴重な資料がまるごと消滅する危険性が生じている。

課題

関係資料の保存や学術的活用には多様な可能性や課題を考慮する必要がある。

旧資料の復刻出版(社会的な活用)には知的財産権に関わる検討が必要

復刻版では、原本の状態の再現, 彩色などの原型を保持すること

デジタルアーカイブ構築の可能性(デジタル化になじまない資料にどう対応

するか)

近年の作業

(1) 出版プロジェクト(復刻版の刊行):『内蒙古外文歴史文献叢書』(日本語文献),全200巻,2012年~,内モンゴル大学出版社。

(2) 連合目録の作成:『内モンゴル館蔵戦前期満蒙関係資料目録』(内モンゴル自治区図書館,内モンゴル大学蒙古学文献中心,内モンゴル社会科学院図書館,内モンゴル档案館)

(3) 『フフ・トグ』紙の復刻出版企画:索引要目の作成,デジタル化の展望。